

☪ 尾形光琳生誕350周年記念 ☪

大琳派展

Celebrating the 350th Anniversary of Ogata Korin's Birth
Treasures by Rinpa Masters – Inheritance and Innovation

| 継承と変奏 |



本阿弥光悦

俵屋宗達

尾形光琳

尾形乾山

酒井抱一

鈴木其一





展覧会のみどころ

2008年(平成20)は、江戸時代の大芸術家・尾形光琳(1658～1716)の生誕350年にあたります。

光琳はやまと絵の伝統を踏まえつつ、斬新な装飾芸術を完成させ、「琳派」という絵画・工芸の一派を大成させました。琳派は狩野派のように世襲による画派ではなく、光琳が本阿弥光悦(1558～1637)、俵屋宗達(生没年不詳)に私淑し、その光琳を酒井抱一らが慕うという特殊な形で継承されてきました。

本展は、その琳派を代表する本阿弥光悦・俵屋宗達・尾形光琳・尾形乾山・酒井抱一・鈴木其一の6人を中心に、わが国の美術に大きな足跡を残したその芸術を展望しようとするものです。絵画、書跡、工芸など、各分野にまたがる国宝、重要文化財はもちろん、海外の美術館・コレクターが所蔵する名品も併せて、個性豊かな琳派の世界を紹介します。

琳派の特徴の一つとして、先達の作品に触発され、同じ題材の作品を描いている点が挙げられます。たとえば「風神雷神図屏風」の場合、宗達作品(国宝、建仁寺)を光琳が模し(重要文化財、東京国立博物館)、さらに抱一(出光美術館)、其一(東京富士美術館)が光琳の作品を模しています。本展の最大のみどころは、こうした同じ主題の著名作品を同時に対比展示することです。これによって、琳派の系譜をより具体的に辿ることができるとともに、各作家の独自性を探るといった試みも可能になります。

琳派を総合的に紹介する大規模な展覧会は1972年(昭和47)に「東京国立博物館創立100周年記念特別展」と銘打って開催されましたが、それから30数年の年月が経過し、その間に琳派に関する研究は目覚ましい進展をみせています。本展ではその成果もふまえながら、琳派芸術を余すところなく展覧いたします。

◆ 尾形光琳生誕350周年記念 ◆

大琳派展

Celebrating the 350th Anniversary of Ogata Korin's Birth
Treasures by Rinpa Masters - Inheritance and Innovation

継承と変奏

開催概要

展覧会名 尾形光琳生誕350周年記念「大琳派展—継承と変奏—」

会 期 2008年10月7日(火)～11月16日(日) (36日間)

■開館時間:午前9時30分～午後5時(金曜日は午後8時、土・日曜日、祝日は午後6時まで開館/入館は閉館の30分前まで)

■休 館 日:月曜日(ただし10月13日(月・祝)と11月3日(月・祝)は開館、10月14日(火)と11月4日(火)は休館)

会 場 東京国立博物館 平成館[上野公園]

Tokyo National Museum Heiseikan[Ueno Park]

観 覧 料	当日	前売	団体
一 般	1,500円	1,300円	1,200円
大学生	1,200円	1,000円	900円
高校生	900円	700円	600円

※ 団体は20名以上。 ※中学生以下は無料。

※ 障害者とその介護者1名は無料。

※ 特別展「スリランカ」(9/17-11/30)は別途観覧料が必要。

※ 特別展「スリランカ」とのお得なセット券(2,000円)発売予定。

■チケット発売所(7月2日(水)より前売券発売開始。会期中は当日券のみ発売)

電子チケットびあ(■前売券Pコード:688-235 ■当日券Pコード:688-236)/ローソンチケット(Lコード:35568)/ファミリーマート/
CNプレイガイドほか主要プレイガイド、および展覧会公式ホームページなどで発売。

交 通 JR上野駅公園口、鶯谷駅南口より徒歩10分、
東京メトロ上野駅・根津駅、京成電鉄京成上野駅より徒歩15分

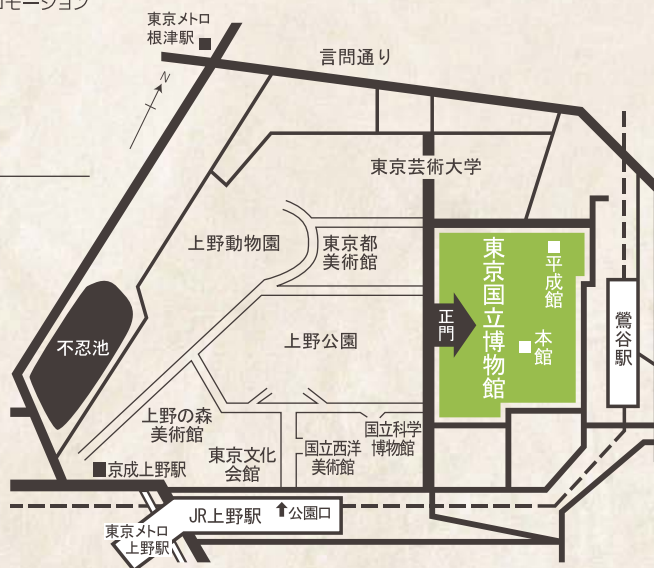
主 催 東京国立博物館、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション
特別協賛 Canon キヤノン株式会社

協 賛 花王

協 力 日本航空

お問い合わせ (ハローダイヤル):03-5777-8600

展覧会公式ホームページ <http://www.rinpa2008.jp/>



■東京国立博物館 
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
■ホームページ: <http://www.tnm.jp/>

報道関係お問い合わせ先

「大琳派展」広報事務局(ウインダム内) 〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル4F
Tel: 03-3639-0721 Fax: 03-3664-3833 e-mail: dairinpa@windam.co.jp

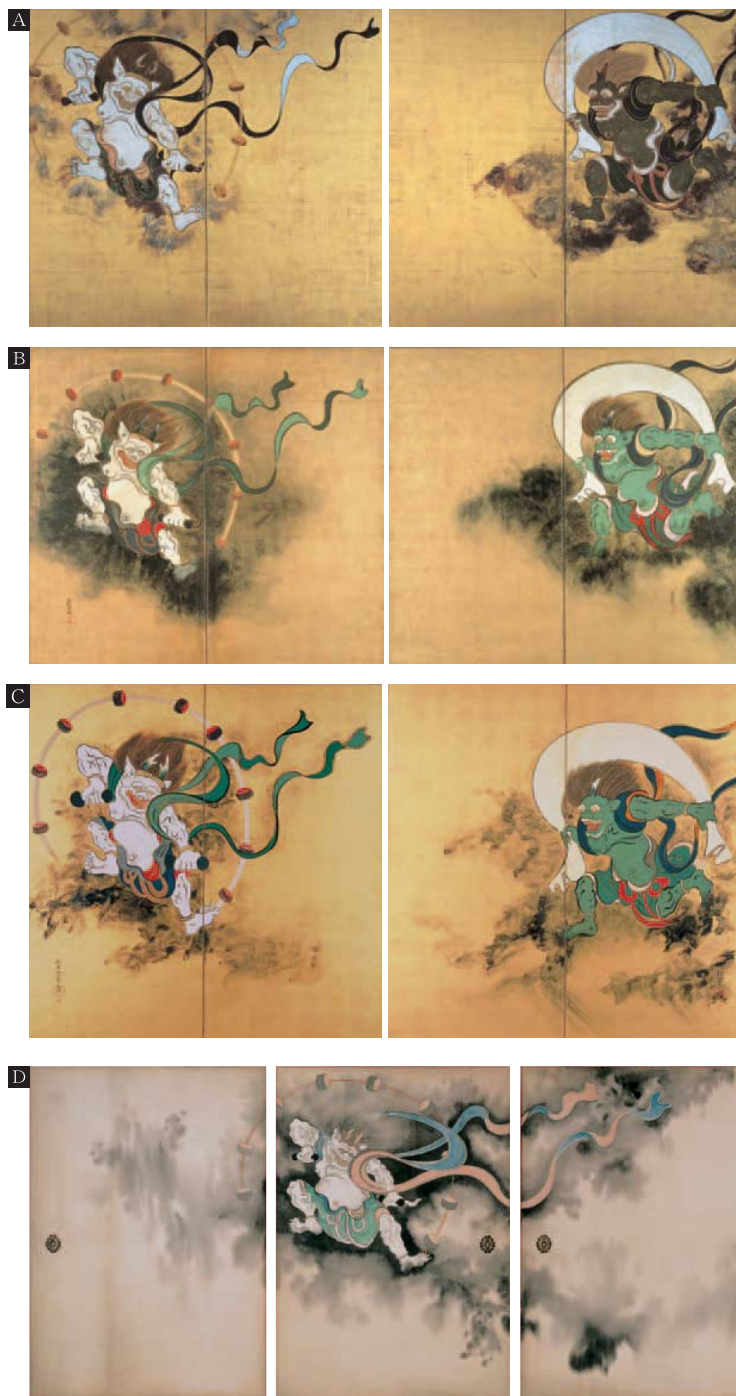
継承と変奏

今回の展覧会は、
同じ主題を描いた作品を集め、
それらを対比することで、
琳派の6人の芸術家たちの間で
何が受け継がれ、
何が新しく表現されていったのかを
ご覧いただき、
琳派芸術の本質とは何かを
感じ取ってもらおうというものです。

展覧会の入り口として
代表的な作品を取り上げます。

A	国 宝	風神雷神図屏風	俵屋宗達筆	京都・建仁寺蔵
B	重要文化財	風神雷神図屏風	尾形光琳筆	東京国立博物館蔵
C		風神雷神図屏風	酒井抱一筆	東京・出光美術館蔵
D		風神雷神図襖	鈴木其一筆	東京富士美術館蔵
E	重要文化財	夏秋草図屏風	酒井抱一筆	東京国立博物館蔵
F		光琳百図	酒井抱一編	東京国立博物館蔵
G		模楓図屏風	対青軒印	東京・山種美術館蔵
H	重要文化財	模楓図屏風	尾形光琳筆	東京藝術大学蔵
I		伊勢物語八橋図	尾形光琳筆	東京国立博物館蔵
J		燕子花図屏風	酒井抱一筆	東京・出光美術館蔵
K	国 宝	燕子花図屏風	尾形光琳筆	東京・根津美術館蔵
L	国 宝	八橋時給螺鈿硯箱	尾形光琳作	東京国立博物館蔵
M	重要文化財	小袖 白綾地秋草模様	尾形光琳筆	東京国立博物館蔵
N	重要文化財	小袖 白紵地梅樹模様	酒井抱一筆	国立歴史民俗博物館蔵
O	重要文化財	扇面貼交手宮	尾形光琳筆	奈良・大和文庫館蔵
P		四季草花蒔絵茶箱	酒井抱一筆 下絵 原半斎書作	個人蔵

大琳派展 概要



※本展覧会は展示替のある作品もございますので、
詳細は広報事務局までお問い合わせください。

※番号 1～14 の作品については広報用に写真貸出をしております。
別添の画像データ借用申込書にご記入の上、広報事務局宛てに
FAXでお申し込みください。

4つの「風神雷神図屏風」

江戸時代初期に2曲1双に描かれた宗達の「風神雷神図屏風」**A**は、琳派の画家によって描き継がれ、琳派を象徴するものとなっています。といってもこの屏風には宗達の署名も印章も見当たりません。にもかかわらず、この屏風が宗達の筆によるものだとするのは、宗達筆とされる数多くの作品の中で最もよくその特徴をあらわしているからにほかなりません。

光琳は、宗達の「風神雷神図」を写す際に、一回り大きな屏風に、二神を大きさもそのままに忠実に写しています**B**。そのため光琳画では上部に余白ができ、画面の中に収まった印象となりました。鮮やかな色彩の対比と形態の明確化は、力強くわかりやすい表現をもたらしています。

抱一が写している**C**は宗達の屏風ではなく、光琳のものでした。抱一は、光琳の

「風神雷神図」**B**の裏に「夏秋草図」**D**を描き、『光琳百図』**E**の最終図に光琳本を掲載しています。このテーマはやはり特別な存在だったようです。抱一画**C**は、模写としての性格があらわれ、墨線と色彩が軽くなりやや調和に欠けた印象を受けます。抱一にとっては、「夏秋草図」を生み出したインスピレーションこそが重要だったのかもしれません。

今回の展覧会では3作品に加え、其一が襖に描いた「風神雷神図」**D**も展示されます。こちらは『光琳百図』との関係が密接なようです。

ともあれ、会場に集う風神と雷神を見比べるだけでも琳派の表現展開が見えてくるのではないのでしょうか。

風神雷神図からの変奏

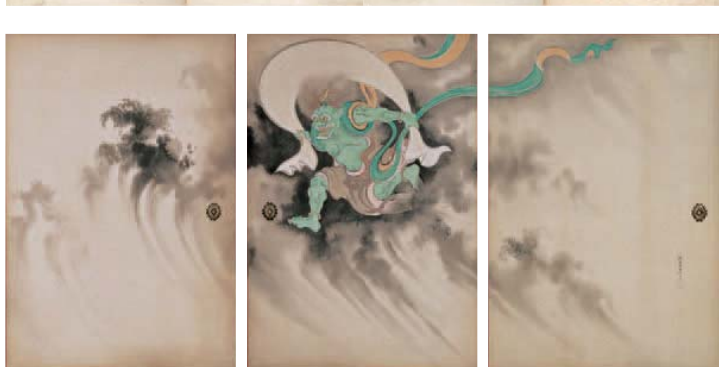
抱一が「夏秋草図」**D**を描いたのは、自身が光琳に連なることを強く意識して光琳の墓碑修復を行った文政4年(1821)頃のことでした。この図は、光琳の「風神雷神図屏風」**B**の裏面に描かれていました。現在、別々の屏風となっている二つの作品は、もとは一作品の表と裏だったのです。

雷神図の裏に夕立に打たれる夏草、風神図の裏に野分の風に吹き乱された秋草が組み合わせられ、神々が住む金色の

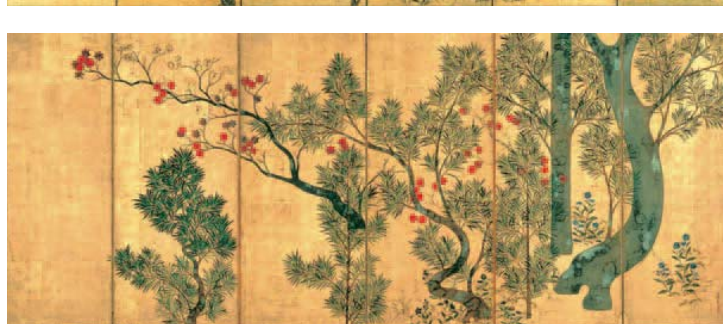
天空から、銀色に冷たく光る夜の野に景色が移されています。高揚感に溢れる無限の時間を持った表、雨風に翻弄される野の草を描いた裏、銀の光がもたらす心理的効果もあって、過去への追憶の情が喚起されてきます。光琳の「風神雷神図屏風」をそのまま写した作品よりも、それを変奏した「夏秋草図屏風」に抱一の光琳継承の態度がよくあらわれています。



E



※8面の内6面



H

2つの「楓図屏風」—宗達から光琳へ—

ほとんど同じ図柄の2つの屏風。一方には宗達が用いた「対青軒」の印が押され**C**、他方には光琳の署名と印があります**D**。光琳が宗達の作品を模写し、新しい創作を行ったことを実際に比較しながら見ることの出来る好例です。もっとも、宗達が用いた印は、宗達工房の画家の作品に押された可能性があり、署名の無い「楓

図屏風」は、厳密には宗達自筆かどうかはつきりとしません。

重厚な趣で奥行きを感じさせる「対青軒」の屏風**C**に対し、光琳の屏風**D**は、枝葉を減らし、楓の紅葉や楓の緑の葉がリズムカルに広がります。それによって鮮やかな絵具が金地と響きあう、明るく華麗な印象の作品になりました。



燕子花 —王朝の物語から俳諧趣味へ—

『伊勢物語』が広く流布した江戸時代、琳派の作家たちは、王朝の恋と雅に対する憧憬から魅力ある作品を生み出し、豊かな芸術世界を作り上げていきました。

光悦は、角倉素庵とともに「嵯峨本伊勢物語」の版行に関わり、宗達は金銀や鮮やかな絵の具を贅沢に使った色紙形の「伊勢物語絵」を数多くのこしています。

『伊勢物語』第九段「八橋」は、東下りの途中三河国八橋で美しく咲く燕子花を見て和歌を詠む話。光琳は、これを掛軸に描き①、さらに主人公の姿を消し去った「八橋蒔絵螺鈿硯箱」②にそのイメージをうつしています。大画面いっぱいに燕子花が咲き誇り、「燕子花図屏風」③では、橋すらも消え、鑑賞者が業平になりかわって、花を前にした感動を受けるのです。光琳によって燕子花は琳派を象徴するモチーフとなりました。

光琳の「八橋図屏風」を写したこともある抱一ですが、この「燕子花図屏風」④は、一匹のトンボを描き加えることで、王朝の物語りから瀟洒な江戸の俳諧世界へと転生しています。



手に取ってみる美術

「八橋蒔絵螺鈿硯箱」②は、硯箱の各面に独立した図を貼るのではなく、6面のうち5面を連続させて八橋がめぐっています。立体を一つのものとして画面が覆っているようにデザインされており、底には燕子花を取り巻く水の流れのように波も描かれています。

「扇面貼交手筥」③は、いったいどこを持ったら良いのでしょうか。全面に扇や団扇が貼られ、底までが絵で覆われています。蓋を開けると中からは富士山が現れ、蓋裏の「八橋図」と組み合わせると『伊勢物語』のイメージが浮かびます。蓋に

は胡粉を置いて盛り上げた紅白菊の団扇が貼られています。

「四季草花蒔絵茶箱」④は、「光琳」の印のある置上菊を秋として貼りこみ、表に春の草花を、茶箱の中に夏・冬の草花を配しています。光琳とされる絵を組みこんだ下絵は、抱一によるもので、鉛板や螺鈿の使用ともあわせ、光琳芸術を継承するものとして位置づけられ、絵と蒔絵のコラボレーションによる斬新なデザインが生み出されています。琳派の工芸には、見て鑑賞するだけでなく、手にとって鑑賞する眼差しが想定されています。



M 貸出写真-1

全期間展示



N

琳派の衣装競べ

光琳は、京都を代表する高級呉服商 雁金屋に生まれています。文化サロンでの遊びも好きで、そのファッションアドバイザーでもあったようです。光琳の後援者であった銀座役人中村内蔵助の夫人が参加した東山での衣装競べでは、そのスタイリストを務めたという逸話が残っています。

光琳の名前は、ブランド名のように使わ

れ、光琳模様として雛形本も刊行されました。その最上級のものが、光琳自身が直接描いた描絵の小袖 **M**。今回出品される1領は、光琳が江戸深川の豪商冬木家の妻女のために描いたと伝えられ、綾地に墨を主にして淡彩を加えて秋草が描かれています。肩を軽くした模様の配置から、光琳が衣装としてのバランスにもよく通じていたことがわかります。

抱一も衣装に描絵を施しました。こちら **N**は、梅の幹を墨で直接描き、紅梅の花を加えた打掛です。光琳の描絵模様に刺激を受けて打掛に筆を振るっただろう抱一。枝を肩と袖に伸ばし、裾に蒲公英などの春草を淡彩で配した構成がとられています。やはり形態に即したデザインとなっています。



O



P 貸出写真-2 全期間展示

本阿弥光悦

一五五八〜一六三七

安土桃山〜江戸前期の芸術家で、刀剣の研磨・鑑定の家業を継ぐかわら諸芸に通じ、書では「寛永の三筆」の一人とも称されました。公家・武家・上層町衆たちと幅広い交友があり、俵屋宗達とともに個性的で力強い造形美を創出し、琳派における総合芸術の端緒をきずきました。徳川家康より拝領した鷹ヶ峰に作った光悦村で、新しい様式の作品を制作するなど、アート・コーディネーター、ディレクターとしての才能が高く評価されています。



重要文化財 鶴下絵三十六歌仙和歌巻

本阿弥光悦筆 1巻 紙本金銀泥絵墨書 各34.1×1356.0 江戸時代・17世紀
 <京都国立博物館蔵> 全期間展示、途中巻替あり

貸出写真-3

金銀泥絵で海上を越えて飛翔する鶴を描いており、緩急自在の変化をつけて展開する鶴の姿は、圧倒的な迫力がある。本阿弥光悦が散らし書きした三十六歌仙の和歌は抑揚に富み、宗達の下絵とよく調和している。



重要文化財 黒楽茶碗 銘 雨雲

本阿弥光悦作 1口 12.4×9.1 江戸時代・17世紀
 <東京・三井記念美術館蔵> 全期間展示

貸出写真-4

光悦作黒楽茶碗の傑作。口が外に反り、腰は丸く、高台はきわめて低い。鉄色の素地に掛けられた黒い釉薬が、一部筋状に削り取られたかのように見えて、驟雨を思わせる。雨雲の銘は、この景色に由来するものだろう。三井家伝来。



国宝 舟橋蒔絵硯箱

本阿弥光悦作 1合 24.9×22.9×11.8 江戸時代・17世紀
 <東京国立博物館蔵> 全期間展示

貸出写真-5

蓋を山形に高く盛り上げた、光悦独特の形の硯箱。蓋の表面には、『後撰和歌集』の和歌「東路の佐野の舟橋かけてのみ思ひ渡るを知る人ぞなき」の文字を散らし書きのように配す。光悦筆宗達金銀泥下絵の和歌色紙と同様、絵と書が完璧に融合している。



桔梗下絵新古今集和歌色紙(難波の歌)

本阿弥光悦筆 1幅 紙本金銀泥絵墨書 20.0×18.0
 江戸時代・17世紀 <奈良・大和文華館蔵>

桔梗と薄の金銀泥下絵に新古今和歌集の歌を書いた色紙。現在、同類の作品は16枚が知られている。慶長11年(1606)11月11日の記年と光悦の署名などは後補と考えられるが、料紙装飾に斬新な技法がうかがえる。

俵屋宗達

生没年不詳

宗達の生涯については、そのほとんどが明らかとなっていないが、京都で扇絵を描く「俵屋」という絵画工房を主宰していたことが知られています。本阿弥光悦の書巻や色紙に下絵を施すなどの仕事をし、さらに宮廷の仕事にも関わり、当時から一流の絵師とみなされ、「法橋」の位も得ています。独特な構図と水墨技法は光琳をはじめ後代の画家に強く影響を与え、琳派の先駆者とみなされています。



国宝 風神雷神図屏風

俵屋宗達筆 紙本金地着色 2曲1双
各154.5×169.8 江戸時代・17世紀
〈京都・建仁寺蔵〉 10/28～11/16の3週間展示
貸出写真-6

雷神が勢いよく舞い降り、風神がゆっくりと姿をあらわす。金銀泥と鮮やかな極彩色によって表現された画面は、宗達作品の基調である明るさとおおらかさに満ちている。本図には署名も印章もないが、誰もが宗達の最高傑作と認める作品である。

国宝 平家納経(願文、見返絵)

俵屋宗達筆 紙本着色 各25.6×25.2 安土桃山時代・慶長7年(1602)
〈広島・厳島神社蔵〉

慶長7年(1602)に修理された『平家納経』の「願文」「化城喻品」「囑累品」の表紙絵と見返絵は、その作風から俵屋宗達の作と考えられている。金銀と彩色を自在に駆使しており、制作年代の知られる最初期の作品である。



伊勢物語図色紙・芥川

伝俵屋宗達筆 1幅 紙本着色墨書 24.6×20.9 江戸時代・17世紀
〈奈良・大和文華館蔵〉

かねて求婚していた高貴な女性を夜に盗み出した男は、鬼の棲家として名高い芥川にさしかかり、背負われた姫が草の上に降した露を「あれはなに」と尋ねる。色紙に各モチーフを絶妙に配置し、鄙びた場面を雅な表現とした宗達絵画の特質が強く示されている。

尾形光琳

一六五八〜一七二六

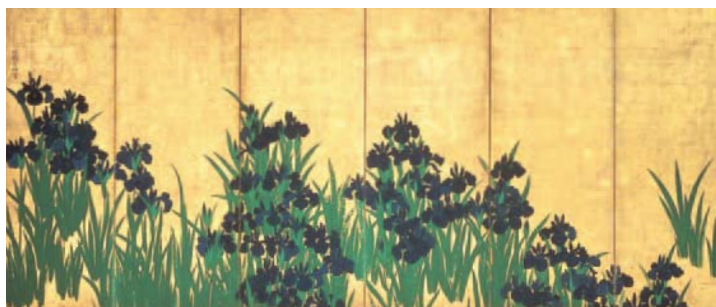
呉服商「雁金屋」の次男として、京都の商業地上京に生まれました。名前は「伊亮」、「方祝」などがあり、通称は「市之丞」のち「光琳」としています。貞享4年(1687)、父が亡くなり、膨大な遺産を相続しますが、派手で社交的な生活のため経済的には苦しく、画家として身を立てることとなります。元禄14年(1701)には、画家の位「法橋」を得て、絵画活動が本格化します。宝永元年(1704)江戸に下り、豪商冬木家や、大名の津軽家に入出し、酒井家からも扶持を受けました。晩年は京都に戻り、59歳で生涯を閉じました。



重要文化財 風神雷神図屏風

尾形光琳筆 2曲1双 紙本金地着色 各166.0×183.0
江戸時代・18世紀 <東京国立博物館蔵> 全期間展示
貸出写真-7

光琳が宗達画に強く心引かれていたことを最もよく示す作品。輪郭線は宗達画に驚くほど重なり、それは写し取ったと言って良いほど。画面は一回り大きくなり、枠の中に収まるように描かれた。色彩が鮮やかになり、墨線は動きをもっている。法橋叙任以後の作品。



国宝 燕子花図屏風

尾形光琳筆 6曲1双 紙本金地着色 各150.9×338.8 江戸時代・18世紀
<東京・根津美術館蔵> 10/7〜19の2週間展示

『伊勢物語』第九段「八橋」をもとに描いた作品。金地の画面に燕子花だけが描かれている。八橋を描かないことで、物語性は払拭され、緑青と群青による鮮やかな色彩とリズムカルな構成によって、文様化されながらも生命感にあふれている。落款書体から40代半ばの制作とされる。



重要文化財 扇面貼交手篋

尾形光琳筆 1合 27.3×38.2×18.8
江戸時代・17〜18世紀 <奈良・大和文華館蔵> 全期間展示
貸出写真-9

光琳が描いた扇面や団扇を、金箔貼りの木箱に貼った豪華な手篋。蓋裏や底、中籠など全面に、光琳得意のテーマを描いた扇面画8枚、団扇画4枚が貼られている。扇面の折れ跡から、実用の後に仕立てられたもので、手篋の制作にも光琳が関わっていた可能性が高い。



国宝 八橋時絵螺鈿硯箱

尾形光琳作 1合 24.2×19.8×11.2
江戸時代・18世紀 <東京国立博物館蔵> 全期間展示
貸出写真-10

二段重ねで、上段に硯と水滴を収めた硯箱。表面には、燕子花と橋を近接的に大きく描きながら、蓋表から四側面まで図様を破綻無く連続させている。八橋のモチーフを幾度となく描いて自家薬籠中のものとした、光琳のような人物だけが構想しえた作品。

尾形乾山

一六六三〜一七四三

京都の富裕な呉服商「雁金屋」の三男で光琳の弟。名前は「惟允」といい、通称は「権平」のち「深省」に改めています。父の死没に際して多くの財産分与を受け、元禄2年(1689)御室仁和寺門前で隠遁生活をはじめますが、この頃仁清の御室窯にも出入りしていました。二条綱平から拝領した鳴滝の山荘で、元禄12年作陶を開始し、この地が都の北西(乾)の方角にあたることから、「乾山」を窯名としました。その後二条丁子屋町に移り、享保16年(1731)江戸に下り、晩年は絵画制作も行い江戸で生涯を終えています。

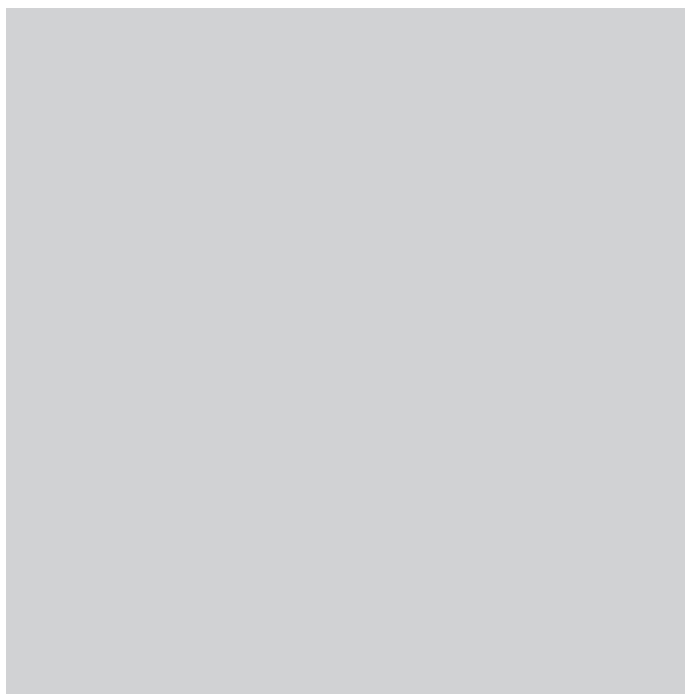


重要文化財 染付金銀彩松波文蓋物

尾形乾山作 1合 23.6×23.3×6.3 江戸時代・18世紀
 <東京・出光美術館蔵> 全期間展示

貸出写真-11

素地の上に白泥・金銀彩・染付で、松が影法師のように描かれている。蓋を開けると内側には一面に、白化粧の上に染付と金彩で表わした波瀾文が現れる。信楽風の素地は砂浜を思わせ、器の外側と内側で海浜風景を表現したものと考えられる。乾山焼蓋物の代表作。



重要文化財 錆絵鶴図角皿

尾形光琳・乾山作 1枚 22.0×22.0×3.0 江戸時代・18世紀 <大阪・藤田美術館蔵>

短い縁を垂直に立ち上げた四方皿の見込みに、光琳が絵を描き、乾山が詩賛を書く、兄弟合作の一群がある。これは10枚組として知られる角皿の1枚で、光琳が鶴と芦を描き、横に乾山が「仰顧するも未だ霽漢に挙げられず。一声清く喚き解きて人を驚かす」と記す。



定家詠十二月和歌花鳥図・霜月

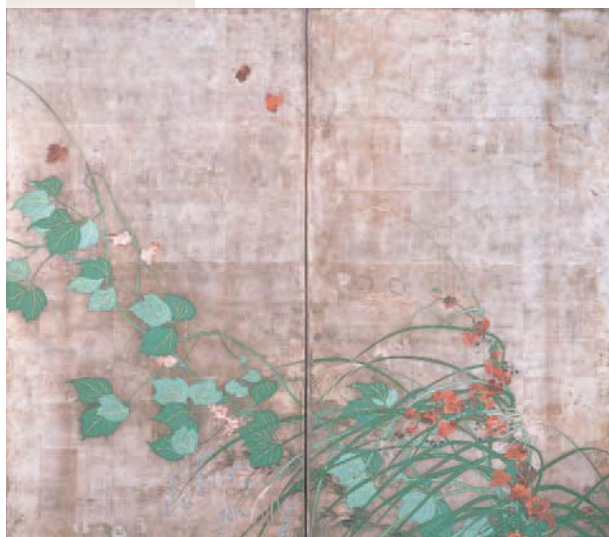
尾形乾山筆 1幅 紙本着色 16.0×23.0 江戸時代・寛保3年(1743) <個人蔵>

藤原定家が詠んだ十二月花鳥和歌をもとに描いた作品。もとは12図のセットだった。絵に和歌2首を添え、王朝趣味のテーマを描きながらも文人的雰囲気漂い、晩年の乾山の画趣が偲ばれる。12月の図に81歳の年齢書があり、没した寛保3年(1743)に描かれたものと知られる。

酒井抱一

一七六一〜一八二八

姫路藩主酒井忠以の弟として江戸に生まれた抱一は、俳諧、狂歌に親しみ、さらには遊里での遊びにも長けていました。絵は狩野派をはじめ、浮世絵や京都で隆盛した写生画など、さまざまな流派を学び手中にしました。隠居した後に、光琳顕彰に力を注ぐこととなり、俳味や機知に富んだ、京のものと一風違った琳派の画風を江戸の地に根づかせることとなりました。



重要文化財 夏秋草図屏風

酒井抱一筆 2曲1双 紙本銀地着色 各164.5×181.8
江戸時代・19世紀 <東京国立博物館蔵> 全期間展示
貸出写真-12

光琳の「風神雷神図屏風」の裏面に描かれた、抱一の光琳への敬慕が込められた作品。銀地を背景に雷神の裏に突然の驟雨に打たれた夏草と、風神の裏に野分立つ秋草が明晰な形態をもって光琳画への返し歌を詠う。第11代将軍家斉の父、一橋治済に贈られた。



四季花鳥図巻

酒井抱一筆 2巻 絹本着色
[上巻]31.2×712.5 [下巻]31.2×709.3
江戸時代・文化15年(1818) <東京国立博物館蔵>
全期間展示、途中巻替あり
貸出写真-13

四季折々の花卉草木に鳥や虫を添え、画面のなかの小さな世界に極彩色の雅な空間を作り出している。それぞれの花鳥は一見、写実的な形象でありながら、その色彩は人工的に装飾されており、抱一の造形感覚が色濃くあらわされている。

まつかぜむらさめ 松風村雨図

酒井抱一筆 1幅 絹本墨画 105.0×33.8
江戸時代・天明5年(1785)
<京都・細見美術館蔵>

須磨に流された在原行平と海人の姉妹である松風村雨が恋を結んだ次第が語られる謡曲「松風」の見立絵。姉妹の表現は人気浮世絵師、歌川豊春の美人画から学んだもので、さまざまな画風を我がものとした抱一の画業の一端を示す作品である。



四季草花蒔絵茶箱

酒井抱一下絵・原羊遊斎作 1合 12.0×20.2×14.0 江戸時代・19世紀 <個人蔵>

原羊遊斎(1769〜1845)は蒔絵の腕もさることながら、当代一流の文化人と親交を結び、名士からよく蒔絵作品の注文を受け、工房を経営した。特に酒井抱一とのコラボレーションは有名で、抱一が描いた下絵を蒔絵で表現した作品が、数多く残されている。

鈴木其一

一七九六〜一八五八

其一は、抱一の内弟子として学び、藩士の鈴木家に婿入りし酒井家家臣となりました。抱一の代筆を務めるほど師風を我がものとしましたが、文政11年(1828)の抱一没後、その個性を開花させ、独特な作品を描きました。京都画壇の円山四条派の画風をも吸収し、其一の作品にみられるモチーフの形態の面白さ、大胆な画面構成や鋭敏な色彩感覚にみられる多面的な美的特質が今日ますます評価を高めています。



あかつきざくら よざくら ず
暁桜・夜桜図

鈴木其一筆 2幅 絹本着色 各91.4×35.8 江戸時代・19世紀
＜兵庫・黒川古文化研究所蔵＞

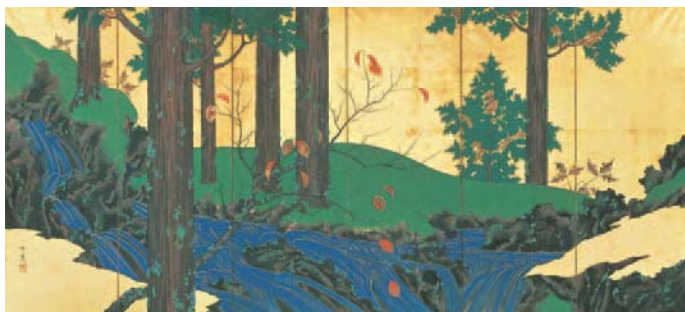
朝の光に染まる桜と闇に暗く影を落とした桜を、表裏から同時にとらえたような姿で対比した作品である。其一は、単に花木を描くだけでなく、風雨や朝夕といった時候や時のうつろいを添えた作品をしばしば描いている。



そさいぐんちゅう ず
蔬菜群虫図

鈴木其一筆 1幅 絹本着色 135.3×68.9
江戸時代・19世紀＜東京・出光美術館蔵＞

胡瓜に添えられた竹に雀が止まり、昆虫が群がる不思議な秋の菜園を描く。本作品は、若冲の作品との関連が指摘されている。人工的なモチーフの形と色彩が其一の独特な造形感覚を色濃く示し、同時代絵画のなかで異彩を放っている。



なつあきけいりゅう ず びょう ぶ
夏秋溪流図屏風

鈴木其一筆 6曲1双 紙本金地着色
各148.5×363.3 江戸時代・19世紀
＜東京・根津美術館蔵＞
11/5～16の2週間展示



檜の太幹に蝉が止まり、紅葉した桜の葉がまさに水面に落ちようとしている。大画面には鮮やかな色彩の対比と、水流の形態感覚に其一の個性が余す所なく発揮されている。せせらぎと、蝉の鳴き声が一瞬間こえた後に、無音の凍りついた時空間があらわれる。

光琳意匠と光琳顕彰

江戸時代、光琳の没後間もない頃から、光琳画は一つの伝統として受け止められていきます。特に小袖のデザインなどでは、光琳在世中に既にその名を冠する雛形本が刊行されていました。小袖に見られる光琳模様は、梅や菊などを大胆に図案化し、略画風に表わしたものです。それは光琳自身の手によるものではなく、模様専門の絵師たちが光琳の図案をもとに創り出した、当時流行のファッションだったのです。光琳の名はブランド名のように使

われ、光琳意匠は大変な人気を博し、小袖に限らず、団扇や焼物、蒔絵の器物にも取り入れられました。永田友治という蒔絵師などは、どうやら光琳風の蒔絵を専門にしたようです。

江戸時代も後期に入ると画壇での光琳評価が高まり、文化12年（1815）には酒井抱一によって、光琳百年忌が営まれます。抱一は光琳作品集ともいべき『光琳百図』を編纂し、光琳の画業を顕彰しました。



こぞでびょうぶ こぞで そめわけあや しあきくさちどりも よう
小袖屏風 小袖 染分綾地秋草千鳥模様
2曲1隻 172.5×189.0
江戸時代・18世紀 <国立歴史民俗博物館蔵>

腰下に水辺の景を表わした江戸時代中期のデザイン。あえて明るいうえを用いず墨描を思わせるような濃い藍色を挿し、簡略化された松の木立を鹿の子紋りにする。光琳模様の特色を示す典型的な作例。



こうりんひゃくず
光琳百図

酒井抱一編 2冊のうち 江戸時代・文化12年(1815年) <東京国立博物館蔵>

『光琳百図』は上下2冊、後編上下2冊あわせて4冊からなる。光琳百年忌に開催された遺墨展出品作品を中心として抱一が編集したもので、抱一が実際に見た光琳作品の図録。抱一と光琳作品の関係を考えるうえで最も重要な資料である。掲載図は、現在メトロポリタン美術館に所蔵される「波濤図屏風」を写した頁。



まきしかまき えりよう し、すずりばこ
楨鹿蒔絵料紙硯箱

永田友治作 1具 料紙箱 41.2×31.2×14.1 硯箱 24.8×19.8×5.2
江戸時代・18世紀 <京都国立博物館蔵>

箱の表面には楨に鹿、鹿に流水などの図様を各面に連続して描いている。こうした文様構成や硯箱内部の形式、錫の板や螺鈿を交える技法、鹿や流水といったモチーフなど、永田友治は光琳の蒔絵の特色を、かなりの確に把握していたようだ。

かんのんぞう
観音像

酒井抱一筆 1幅 絹本着色 134.0×65.0
江戸時代・文化12年(1815年) <京都・妙顕寺蔵>

抱一は、光琳の継承者として、文化12年(1815)光琳百年忌を営んだ。本図は、その供養のために描かれたもので、光琳の墓所妙顕寺に奉納された。光琳が得意とした立葵・紫陽花などを取り合わせて手向けた花瓶には、光琳の冥福を祈る抱一の言葉が記されている。

年表

1558	永禄 元			
1582	天正 10			本能寺の変
1584	天正 12			
1585	天正 13			羽柴秀吉関白になる
1600	慶長 5			関ヶ原の戦い
1602	慶長 7	本阿弥光悦 (1558 1637) 宗達活躍期 (1596 慶長元禄 ー?)	平家納経(広島・厳島神社蔵)補修、宗達表紙絵、見返絵描く?	
1603	慶長 8			江戸幕府開かれる
1605	慶長 10		光悦このころ嵯峨本制作	
1615	元和 元		■光悦鷹ヶ峰に土地を賜る	大阪夏の陣、豊臣氏滅亡
1616	元和 2			
1621	元和 7		養源院障壁画(俵屋宗達筆、京都・養源院蔵)	
1623	元和 9			
1626	寛永 3		このころ光悦筆和歌巻「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」(京都国立博物館蔵)	
1630	寛永 7		西行物語絵巻模写(俵屋宗達筆、東京・出光美術館蔵)	
1637	寛永 14			
1639	寛永 16		このころ「風神雷神図屏風」(俵屋宗達筆、京都・建仁寺蔵)	鎖国令
1642	寛永 19			
1657	明暦 3			明暦の大火
1658	万治 元	尾形光琳 (1658 1716) 尾形乾山 (1663 1743)		
1663	寛文 3			
1680	延宝 8			徳川綱吉將軍となる
1689	元禄 2			
1699	元禄 12		■乾山鳴滝窯開窯	
1701	元禄 14		■光琳法橋叙位	
1702	元禄 15			赤穂浪士討入
1703	元禄 16		このころ「燕子花図屏風」(尾形光琳筆、東京・根津美術館蔵)	
1704	宝永 元		■光琳江戸へ下る 「中村内蔵助像」(尾形光琳筆、奈良・大和文華館蔵) このころ「小袖 白綾地秋草模様」(尾形光琳筆、東京国立博物館蔵)	
1709	宝永 6		■光琳京都へ帰るか このころ「風神雷神図屏風」(尾形光琳筆、東京国立博物館蔵)	
1712	正徳 2			
1716	享保 元		■乾山二条丁子屋町へ移る	
1731	享保 16		■乾山江戸へ下る	
1743	寛保 3		「定家詠十二月和歌花鳥図」(尾形乾山筆、個人蔵ほか)	
1744	延享 元			
1761	宝暦 11	酒井抱一 (1761 1828) 鈴木其一 (1796 1858)		
1785	天明 5		「松風村雨図」(酒井抱一筆、京都・細見美術館蔵) 抱一このころ浮世絵風美人画制作	
1787	天明 7			
1796	寛政 8			
1797	寛政 9		■抱一京都・西本願寺で得度	
1807	文化 4			
1813	文化 10		『緒方流略印譜』(酒井抱一編)	
1815	文化 12		■抱一、光琳の百回忌を営む 『光琳百図』(酒井抱一編) 「観音像」(酒井抱一筆、京都・妙顕寺蔵)	
1816	文化 13		「四季花鳥図屏風」(酒井抱一筆、京都・陽明文庫蔵)	
1818	文政 元		「四季花鳥図巻」(酒井抱一筆、東京国立博物館蔵)	
1821	文政 4		「夏秋草図屏風」(酒井抱一筆、東京国立博物館蔵) このころ「風神雷神図屏風」(酒井抱一筆、東京国立博物館蔵)	
1826	文政 9		『光琳百図後編』(酒井抱一編)	
1828	文政 11			
1833	天保 4		■其一京都へ上る	
1841	天保 12			天保の改革
1845	弘化 2			
1853	嘉永 6			ペリー来航
1858	安政 5			
1860	万延 元			桜田門外の変
1867	慶応 3			大政奉還
1868	明治 元			明治維新

